EICA Journal of EICA Essay エッセイ

市場と民主主義

Market and Democracy

笠倉忠夫
Tadao Kasakura

EICA 名誉会員

現在，世界の多くの国々は経済システムとして「市場経済」を採用しています。そして，この市場経済は政治体制の如何を問わずその規模をグローバルに膨らませ，その活動は拡大する一方で，今や一般社会は市場に飲み込まれたとさえ言われています。

一般社会と経済のこの様な関係に言及した嚆矢はハンガリの経済学者カール・ポランニー（1886-1964）と言われますが，彼は“経済が高度化すると，社会関係の中に組み込まれているはずの経済関係が逆に社会関係を規定するようになる”と述べています。この様な慧眼に対して，現今，改めてポランニーに対する関心が高まっています（ポランニー著，若森みどり他訳「市場社会と人間の自由」2012）。一方，白熱教室で名を馳せたハーバード大学のサンデル教授も市場の役割は認めながら，現在の大規模化した市場経済が社会に及ぼす影響を懸念しています（朝日新聞紙上の討論；2012, 6/7　或いは「それをお金で買いますか」早川書房，2012 等）。彼の言う「市場論理」は今や社会全体の意味を規定する程多くの領域に入り込み，道徳や価値観まで含めた多くの課題に影響を与え，国の政治さえ左右します。

その典型的な例として，2012 年のギリシャの債務危機問題が挙げられます。ギリシャの債務危機では，市場が求めるユーロ受け入れ条件である経済の緊縮策を受け入れるか否かを巡って総選挙が行われ，結果は緊縮策受け入れ票が僅差で反対票を上回りました。一見，民主主義的手続きによる意思決定とも見えますが，市場が齎すモラル面での限界に関わる議論を欠如したまま多くの反対意見を屠ってしまったのであれば，ギリシャの民主主義は市場論理に抑え込まれたと言っても過言ではないでしょうか。

ただし，政治制度としての民主主義を考える場合，民主主義にも意思決定段階に大きな陥穽があることを忘れてはなりません。民主主義の合議体において意思大多数の意見が肯定されるという「数の論理」によって意思決定が行われます。問題は採決までに充分な意見交換や互いの価値のすり合わせ等，充分な熟議（deliberation）が行われたかが問われるのです。現代の社会は価値観が多様化した成熟社会ですので意思決定までの対話，討議が欠かせません。しかし現実には，殆どの会議が自己主張の陳述に留まり，後は数の論理に委ねると言うのが実態ではないでしょうか。

民主主義の定義は“government of the people, by the people, for the people”ですが，現代の民主主義はこれまで見て来た通り幾つもの重大な問題を抱えて機能不全を起こす危機的状況にあります。では今，世界に民主主義に勝る優れた政治制度があるのでしょうか。嘗て，イギリスの名宰相チャーチルは「民主主義は最悪の政治制度だ。ただし，それ以外のこれまでの制度はもっと悪いものばかりだが……」と彼の「第二次大戦回顧録」の中で述べています。私はこのアイロニーは今でも正しいと思います。第二次大戦の敗北を通して民主主義を学び取った我が国は，これまで一般社会と経済との軋轢も殆ど感ずる事なく，平和裡に経済大国に伸し上がりました。21 世紀は民主主義の実験の時代などと言われてもいますが，成熟社会となった今，市場との対峙など民主主義を阻害する課題をいかに克服していくかが問われる所です。

さて，2 年間に渉って学会誌 EICA にエッセイを書かせて頂きました。始めは，第 1 回に引いた Lamb の精神を帯して等と意気込みましたが，非才にはそれは始めから無理な事，各号共その時点，時点の勝手な時評に終わってしまい申し訳なく思っております。顧みれば，EICA も創設から既に 20 年以上が経過し，若い世代会員の時代となり，新しい時代が切り開かれて行くことが期待されます。EICA の益々の発展と皆様のご健勝を祈念して筆を擱かせて頂きます。